慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	利子説明の基礎に関するボエム・バヴエルクとクラークとの論争（上）
Sub Title	
Author	金原, 賢之助
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1921
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.15, No.8 (1921. 8) ,p.1162(100)- 1173(111)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19210801-0100

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

に意味があるからである。其れは單に工場工業制度の發達や都市人口の集中作用に就て述べる丈けでなく工場制度の發達に依つて都市に集められた所謂無產者階級が都市に來るに至る迄に如何なる經過を通つて來たかを明かにしておくのは本稿の目的である、十九世紀初期の都市生活の暗黑面の一部を說明する上に非常に都合がいゝからである。以下斯の如くして都市に集つた人々の生活の一面を覗つてみる。（未完）

利子說明の基礎に關するボエム・バヴエルクとクラークとの論爭（上）

金原賢之助

資本の本質は具體性なりや抽象性なりやに關しては、或は明確なる區別を設くる者あり、或は之を示さゞるものあり。以て Adam Smith 以來今日に至る迄甲論乙駁未だ意見の一致を見ざるの有樣なり。余は本誌前月號に於てクラーク教授の資本の機能に關する說の大要を紹介しボエム・バヴエルクの之に對する批判を述べたれども、實に斯る意見の不一致は一方が資本の具體性を主張するに反して他方が資本と資本財との間に嚴重なる區別を存せしめんとするに因るものにして、嘗て此問題に就て彼等が大西洋を挾みて花々しき論戰に力めしことは世人の記憶に存する所なるべし。斯くの如き見地に立てる彼等が利子の說明に關しても意見の扞格あるは理の當然なり。吾人は次に聊か彼等の利子に關する論爭を略述すべし。

一

Böhm-Bawerk の見解に從へば、一般に現在の財は同一の種類數量の將來の財よりも價値多き

ものにして此命題こそは利子學說の心髓を成すものなり。而して主觀的評價の結果が客觀的交換價値を決定するものなるが故に、現在財は概して同種同量の將來財よりも高き交換價値及價格を有するものなり。而して此現象は數個の原因を有するものなり。其第一は現在及將來に於ける慾望及準備の相違に存するものなり。第二は將來の慾望及其を滿足すべき財を低く見積ることなり。最後の理由は、現在財は技術上の理由によりて慾望滿足の爲に一層優れたるものにして、從つて將來財よりも高き限界效用を有すと云ふことなり。

斯る命題が利子問題の心髓たる所以を明かならしめんが爲に最も單純なる場合を撰ばんに、其は貸附の場合なり。貸附は現在財を將來財と眞實に交換する場合に外ならず。貸主Aが借主Bに現在財の或高—例へば現在の幾磅—を與へる。Bは其財を好むがまゝに處置すべき完全且自由なる所有を得。之と同樣にBは又Aをして全く同一の併し將來の財の或高—例へば翌年の幾磅—の完全且自由なる所有を得せしむ。而して現在及將來の財の市價を決定する所の主觀的評價の結果は概して現在財に有利なり。從つて借主は現在受くる貨幣を彼が將來與ふる所のより大なる金額の貨幣によりて購うことゝなるべし。斯くして彼は打步(agio)或は割增(premium)を拂はざるべからず。此打步は即利子なり。依て利子とは現在財及將來財の間に於ける價値の相違より最も直接に生ずるものなり。

實に利子は經濟的產物にあらずして時に歸因する打步なり。將來用ふる財と比較して現在用ふる財には割增があるなり。即或貨物によりて現在受く可き service と其れと全く同じき貨物によりて將來受く可き service とを比較するな

り。

以上簡單に述べし所によりて觀るにBöhm-Bawerkは利子學說に於てagio theoryを採ること明かなり。(Böhm-Bawerk, The Positive Theory of Capital, 1891, Bk V, Vi; same, Recent Literature on Interest, 1903, Chap. II. 參照)

斯るBöhm-Bawerkの利子の說明に對して批評を加へんとするは決して「時(time)を利子問題に於ける要素として認めんとすること」には存せずして「將來の時の經過は、貯蓄によりて得らるべき利得に對する資本家の現在の見積を、著しく減少せしむると云ふことを、指示せんと試むる」に存することを明言してJ. B. ClarkはBöhm-Bawerkの說に對して批判を加ふるに至れり。

若しも此假定（現在及將來の同一の具體的財が比較せらると云ふ假定）が正當なるものならば資本家の行はんとする順序は次の如くなるべし。現在終了せる時期の所得より彼は其時期の必要なる費用を支辨して尙ほ例へば二百弗彼の手許に殘れるを見る。彼は之を好むまゝに用ふることを得るを以て其れを今費消せんと欲するならば彼は其馬車馬を購はんと定める。更に彼は實際は其れを將來（例へば一年の終りに於て）其同一物の爲に費さんと定める。其馬は今日に於ては百九十弗の價値あり、從つて利子步合は五分なり。(J. B. Clark, "The Genisis of Capital," The Yale Review Vol. II, p. 303)

然るに斯る假定はClarkの意見に從へば次の二點に於て事實と異るもなり。

(1)眞の資本化(或は資本形成)は永續的にして一時的にあらず。其は、(true capitalizationは)斯く蓄積せられたる元本を將來の時期に於て消費するの目的を以て、今日富を貯蓄することに存するものにあらず。其は其獲得せる元本を全く費消せざるの意思を以て貯蓄することに存するなり。若しも余が今贅澤を止めて其價値を余の財產に加へたるならば、余は將來財產を減少するの考へを以て之を爲すにあらず。又此方法によりて贅澤を得んとの計畫にて其を爲すにあらず。余は其額を永久に蓄積して、其を消費せば得られたる快樂を全く棄てたるなり。

社會には決して費消せざる而して常に利子を獲得する資本の元本あるなり。若し人が此永續的元本に加增を爲すならば、彼は其れを自身の或支出を全く拋棄することによりて行ふなり。此は典形的資本家の爲す所にして彼は手附けずに置いて總ての其累積物と共に彼の相續人又は後繼者に移轉せんと思ふ所の財產に或ものを附加するなり。(Ibid, p. 304)

(2)然れども社會には準資本家(quasi-capitalist)なる一時的に蓄積する人々の階級あり。彼等は後に消費する目的を以て今金額を蓄積するなり。之等の人々こそは—若しあるならば—現在の財を同種同量の將來の財と比較するの地位に在るなり。彼等は一般に彼等が一八九三年の所得より一〇〇弗を貯蓄することによりて拋棄する所のものを知り、又彼等が欲するならば一八九四年に於て若しくは其れより後の時に於て其額を費して全く同一の事物を購ふことを得るなり。然らば彼等は此方針を採ることを豫期するか。之等の人々すらも現在買ふことを控へる所の特別の財を、將來の時に於て購入せらるべき全く同種類の財と比較するか。Clark自身の見解に從へば之等の人々はa rainy day（困窮の時）の爲に貯蓄するなり。彼等は彼等の蓄積物を特に必要とするに至る可き時の爲に準備しつゝあるなり。正常の所得の來らざる時は貯蓄は

引出されざる可らざるなり。彼等の基金を蓄積するは之等の時期を豫期しての事なり。

然らば「彼等は彼等の一時的の資本を得んが爲に、彼等が今所有せずして間に合ふ所の物其ものを得んことを期するか？」又「彼等は現在の財より得らるゝ利益を同種同量の將來の財より得らるゝ所の其れと胸中にて比較を爲すか？」と云ふに決して然らずして彼等が今日之無くして濟む所のものは彼等が贅澤品として蔑視する所の或ものなり。而して彼等が將來買はんと欲する所のものは生活必要品の或るものなり。彼等が今日拋棄する所のものと將來購入せんと豫期する所のものとの間の著しき相違點が、彼等の活動（一時的の資本を蓄積すること）に對する動機となるなり。實際彼等は今日存在する a sum of wealth を將來用ひらるべき同じ額と比較するなり。二個の額を評價する方法に對する鍵は二つの時に於て彼等が全く異りたる財を代表すと云ふ事實なり。（Ibid, pp. 304-5）

Böhm-Bawerk の斷定が右の二點に於て事實と異るものなりとすれば資本家の行はんとするプログラムも亦從つて變ぜざるを得ず。即眞の資本家は彼の元本を全く費さんとするものにあらず。彼は現在の財を將來の財と總ての類似點に於て比較するの理由なし。彼が現在の財と同種の將來の財とを觀察し得るは、唯彼が現在貯蓄し居る所と同一の金額を或時に於て消費するの考へを廻らし居るが故なり。準資本家は彼の貯蓄を費消はすべし。然れども彼の之を爲す理由は彼が今日貯蓄を以て購入し得る所のものより一層遙かに必要なる物を買入るゝを必要とすべしと云ふ事實なり。從つて同種同量の現在及將來の財の比較は自ら念頭に上らざるなり。（Ibid, pp. 305-6）

而も人々が現在に於ける或現象を將來に於て豫想せらるゝ或他の現象と比較する方法が利子研究上考量せざる可らざる根本的事實なり。（Ibid, p. 306）然るに Böhm-Bawerk が前述の如くに「利子を現實に生活上に行はれざる比較の上に基けしこと」は Clark の意見によれば Böhm-Bawerk の定義迄遡り得るなり。即後者は Capital と Capital-goods とを同一視し「永久的元本又は貨幣に表はし得る――現實に貨幣に表はされずとも――資本の普通の實際的概念に代ふるに具體的財の概念」を以てせしなり。經濟學が煩はされし多數の Wage fund literature の如き資本と資本財とを混同せし最も大なる一結果たるなり。

二

以上述べしが如き Clark の批評に對して Böhm-Bawerk は如何なる態度を採りしか。彼自身の說明によれば彼は決して Clark 教授と相反するが如き意見を抱かざりしものにして、其は彼が Clark の例を引用して自己の說も全く之と同樣なる旨を述べしことによりても知られ、又既に Positive Theory of Capital に於て 'Money' を用ひて現在の財は將來の財より價値多しと云ふ句を說明せしことによりても知らるゝなり。然れども尙ほ Böhm-Bawerk の意見に從へば Clark の用ひたる例は嚴密に云はゞ現在及將來の財を比較するの場合にあらずして唯、一財の現在及將來の使用及富の同一の金額を比較するの場合なり。されど其根本的思想は兩者の場合に於て同一なりとて其の例によりて自說を述べて曰く「貯蓄する所の人は二〇〇弗が彼にとりて "present dollars" として現在消費するならば大なる價値を有するか、或は "future dollars" として將來用ふる爲に保存するならば大なる價

値を有するかを評價すべし。貯蓄する人は彼が現在に於て二〇〇弗に對して得可き所の限界的使用(marginalemployment)を此評價の前半に於て考察するなるべしと云ふことは明かなり。然れども余が反覆詳述せしが如く次の事も亦自ら明かなり。即此評價の後半に於て將來の財を評價するに際しては、貯蓄を爲す人は現在に於る彼の必要の狀態を考察することなく、而も件の富の金額が用ひらるゝ將來の時期に於ける需要と供給との間に於ける關係を考察すべし。其れ故困窮の日の爲に貯蓄する人は、彼が將來の必要なる時期に於て滿足せしむる爲に二〇〇弗を用ふる所の其れ等の必要なる慾望を、彼の評價の基礎となすべし。而して "true capitalist" は類似せる方法に於て將來の利子所得の價値を、各種の必要なる或は有用なる貨物—其れ等のものは將來の該時期に於ける彼の全所得の狀態に從ひて、彼にとりては獲得し得る物の限界に存するもの—によりて評價すべし。(Böhm-Bawerk, "The Positive Theory of Capital and its critics," Quarterly Journal of Economics, Vol. IX, pp. 115-117)

一方に於て Clark 教授は如何にして次の如き奇妙なる結論—余の說に從ひ貯蓄する所の人は driving horse の價値以外の何ものも將來に對する考量中に入るゝことを得ざること及其貯蓄せられたる額は其後永久に斯る馬の購入に充てざる可らずと云ふこと—に來りしかと云ふことは余にとりて神秘なることなり。此結論は實際彼の例に於ても余の學說に於ても何等の根據なきが如く思はるゝなり。又其例に於ても根據なし。何となれば其れに於ては貯蓄せらるべき具體的の現在の財は馬車馬にあらずして二〇〇弗なればなり。而して余の學說に於て、若し余が現在及將來の財の比較に際して常に其兩者に對して同一の利用を考量の中に入れざる可らずと教ふるならば斯る誤解も是認さるゝを得可し。然れども既に述べしが如く余は此反對を說けるものにして、余の說によれば現在の財が將來の財より優れることは、何人も一般に異りたる利用を爲し得ること及其人が或將來の時期迄は自由に處分すること能はざる所の同じ分量の財を利用し得るよりも實際一層有利なる利用を爲し得ると云ふ事實に基けるなり。」(Ibid, pp. 117-118)

斯くて Böhm-Bawerk は Clark の非難は全く其誤解に因由するものなることを說き彼の例に於ても又學說に於ても斯る說明を與へたることなきを證明せり。而して Clark 教授の反對は果して那邊より生じたるかを穿鑿して曰く「Clark 教授は彼の反對は "time" を利子問題に於ける要素として認めると云ふことに對してにあらず

と明かに述べ居れり。彼が烈しく攻擊する所の命題—現在の財は同種同量の將來の財よりも價値ありと云ふ命題—に於て其最後の「同種同量」と云ふ數語が特に Clark 教授の反對を惹起せるなり。」(Ibid, pp. 118-119) 然らば現在の財は將來の財より大體平均して一層價値ありと云ふ命題に對して彼は何故 Clark の誤解と反對とを惹起す所の制限即 "like kind and quantity" なる制限を附するや。之に對して答ふる彼の理由は極めて簡單なり。即「其命題の後半なくしては其前半が理解さるゝを得ざるか、或は完全ならざるべし」と云ふにあり。蓋し茲に實際表はさるべき思想は「時差(difference of time)が現在の財に對して將來の財以上に優越(superiority)を與ふ」と云ふことなればなり。即斯る思想を表はさんが爲には或前提を必要とするものにして之を彼の見解に從ひて示せば次の二點となるべ

し。

（一）一例を擧ぐれば現在の金剛石が將來の礫石よりも價値多しと云ふ事實は此優越と何等の關係なきこと、現在の二千弗が將來の一千弗よりも一層價値ありと云ふ事實が之を關係を有せざると同樣なり。

（二）此優越は、現在の一千弗が將來の一千弗よりも價値多しと云ふこと或は現在の十噸の鐵は將來の十噸の鐵よりも價値多しと云ふ記述の中に最もよく吟味せられ而して描寫せらるゝなり。

換言すれば「時差が現在の財に對して將來の財以上に與ふる所の優越を明かに且正しく表はすが爲には、人は同種の物と物とを比較せざる可らず―例へばdollarsとdollarsにしてdiamondsとpebblesとにあらず―而して同量の物を比較せざる可らず―1,000と1,000にして1,000と2,000にあらず」其れ故「此"goods of like kind and quantity"と云ふ補充は論理的にも必要なるものなり。」(Ibid, p. 119)

彼は亦斯る必要なる補充は「如何なる他の形式に於ても同樣に正しく表はされ得るものなるを信ぜざること」を附加して曰く「特に相互に對して"like sums of wealth"（富の同額）の代りに"like sums of value"（價値の同額）を置かんとすることは認め難きことなるべし。何となれば現在の「價値額」(sum of value)の優越を表はす爲に人は、或現在の價値は同じ大きさの將來の價値より一層大なりと云ふ、論理的に矛盾せる斷定を爲さゞる可らざればなり。即論理的正確に關しては一封度の鐵は一封度の羽毛より重しと云ふ人口に膾炙せる諧謔的の斷定と決して異らざる所の命題を爲さゞる可らざればなり。」(Ibid, pp. 119-120)

即Böhm-Bawerkは Clarkが like sums of wealthの代りに like sums of valueを置かんとするを反駁せり。彼をして言はしむれば現在の馬車と將來の馬車とは比較して現在の方が價値多しと言ふことを得れども價値に於て現在と將來とを比較するも兩者相等しきものなる以上一方が他方より greater なりと云ふことを得ずとなせり。蓋し現在のAなる valueは將來のAなる valueと比較して大なることも小なることもなく全く相等しければなり。其が抽象的なる以上相等しき價値の間に大小ありと云ふことは論理的矛盾なりと云ふなり。而して彼が馬車と馬車とを比較したる時現在のものは將來のものよりも早く利用さるゝことを得又其他前に述べしが如き理由によりて現在の馬車は將來の其れよりも價値多しと云ふなり。勿論其馬車の dollars と dollars とを比較するものなれども其馬車と云ふ具體物のありてこそ比較さるゝものにして抽象的の valueは比較さるゝを得ずと云ふものゝ如し。然れども Clark と雖全然抽象的の valueのみを比較するにはあらざるべし。唯彼は實際比較せらるゝものは同一の具體的財に非らずして其は全く異れる財の二個の金額なりと言ふなり。

F. A. Fetterは此點に關して述べて曰く「"the technical superiority of present goods over future goods"（現在の財は將來の財より技術的に優る）と云ふ句の中には、其れ等の財が"dollars"を意味するものと爲さるゝ場合に於て、如何なる意味の存するや。用ひらるゝ現在の財が、普通の場合に、個々の生產者によりて保持せられざる或は社會によりて用ひ盡くされざる通貨(circulating medium)として考へらるゝ場合に於ては其は確に極めて異りたる外のものを意味す

るなり。實際は Böhm-Bawerk は資本に關する二つの異りたる概念を用ふるの普通の誤りに陷れるなり。而して最始の攻擊に於て支持す可らざる地位に在るを發見せられたるなり。」(Fetter, "Recent Discussion of the Capital, Conecpt" quar. Jour. of Eco., Vol. XV, p. 8.)

「同種同量」と云ふ補充語の必要なる所以を論述せし Böhm-Bawerk は更に鋒先を轉じて「自身の辯護よりして尊敬する反對者の其れに對する攻擊」に移れり。語勢を强めて言ふ「Clark 教授は、前に引用せし比較は認め難き形式なることを恐らく念頭に有せらる可しとは余が正に述べし所なり。(然れども)余は茲に何等斷言するを得ざるなり。何となればClark 教授は此問題に關して正確なる說明を避けて二重の解釋の認めらるゝ漠然たる言葉——a sum of wealth (富の額) 或は an amount of wealth (富の高) と言ふ——を選擇して使用し居ればなり。之は財の額と同時に價値の額も意味すべし。然れども余は、之等の事情の下に於て若しも Clark 教授が彼の意味する所を正確に限定せざるを得ざるならば、彼は正しく余が斷定する所を斷定するか或は確かに誤れる或物を斷定するか其何れかを爲さゞる可らざるべしと云ふことは、確に主張し得ると思ふなり。何となれば彼は彼の amount of wealth によりて財の高を意味するか、或は價値の高 (an amount of value) を意味するかならざる可らざればなり。而して前の場合に於ては、彼が現在の財の優越を示さんとするならば、彼は必ず其比較の半に於て同種同量の財を參考せざる可らざるなり。然るに後の場合に於ては或一定の現在の價値が等しき大きさの將來の價値の高より大なりと云ふ斷定は正に批判せし自家撞着を含むものなり。しかるに、Clark 教授は彼が二重の解釋の許さるゝ漠然たる意義を有する用語を採りしを非難し斯る批判は亦Clark の資本概念の全體に對しても加ふるを得べしと論ぜり。(未完)

經濟史研究に就いて（二）

野村兼太郎

四

「然し斯くの如く休戰したと云つてもそれは確にそれに就いて各自の意見を求めて居る學生に、それ等を明白に說明することを吾人の誰かゞ止むべきものではない。而て殊にある者の地位を、新大陸に於いて新しい義務を引受けるやうにする機會は極めて稀であるから、此の場合は明に例外に入るべきものであらう。又次ぎのやうなことを記憶して置いて貰ひたい。即ち余は余自身の個人的の判斷を述べるに過ぎない。余と全然違つた意見を有たれる多くの有能の士の居られることも十分よく知つて居る。余の云ふところを聞き、直ちに去つて他の方面を研究する者の存することは十分あり得べきことである。而して其の人々はさうするのがいゝのである。尙ほ余に提議せんとして來る有能な且眞に用意せる心の圓熟せる學生に告ぐべきことは略々次ぎの如きものである。

『云ふ迄もなく諸君はすでに經濟學にある注意を拂つて居る。學說の重なる輪廓、例へばジョン、スチュアト、ミルに依つて述べられたやうなものを熟知して居る。又アダム、スミスからミル迄の經濟史及びミル時代以後の發展の大要を幾らか知つて居る。若しも此の準備も實際未だ得て居ないのなら余はそれを得るやうに忠告する。其の研究は諸君に後に便利であるやうな